

〈解答〉

① 1 おりふし（ひらがなのみ可）
2 「例」（惕斎の家が）延焼する心配がなくなった（から。）（12字）

3 ア

4 イ

5 ウ

配点 各2点 10点満点

〈解説〉

「思斎漫録」は、江戸時代後期の朱子学者、中村弘毅（字は新斎、土郷、梅華）によって児童向けに著された随筆集。本問に登場する中村惕斎は、江戸時代前期の朱子学者であり、篤実な人格と博識で知られた。

1 古文の「おりふし」は「おりふし」と読み、「折節」と書く。「ちようどその時」を意味する副詞の一部なので、「ふ」は「う」に直さない。

2 火事があったが、2～5行目『惕斎の家、風下なりしかば、親戚門人驚きてはせあつまりし（＝風下だったので、親戚や門下生が驚いて急いで集まった）』が、『たちまち風ふきかはり、風上となり、今は類焼のうれへなし（＝急に風向きが変わって、風上となり、今は類焼する心配がない）』ので、『衆みな心を安んじ、相賀する（＝集まった人はみんな安心して、お互いに喜んだ）』のである。

3 「措」には「置く、そのままにしておく」という意味があり、現在でも「それはさてお（措）き」などと使う。傍線③の直前に『さぞ周章し（＝きつと慌てふためき）』とあるので、「そのまま（平常心で）いる場所を失う」、つまり「不安でたまらなくなつた」という意に解する。ちなみに「手足を措く所なし」は論語の言葉で、手足を伸ばすこともできない意から「安心して身を置く場所がないほど不安な状態」を表す故事成語である。

4 6～8行目の『その火もとのうれふるなり』までの文は「惕斎」の言葉であること確かめる。また、『いそぎ火もとはせ行き、防ぎたすけし』は「あつまれる人々（親戚門人）」の行動である。

5 風向きが変わったことで新たに類焼の危険に遭う人たちがいることを心配している惕斎を見て、自分たちのことばかり心配していた親戚門人は、他人のことにまで考えが及ぶようになったことをふまえると、ウが適切である。ア「どんな時でも常に冷静でいなければならぬ」、イ「たとえ自分たちが不利になるとしても」、エ「その場で臨機応変に対応することが大切である」、オ「どうすれば自分たちの利益になるのか」の部分が適切でない。

〔大意〕

中村惕斎先生は京都の人で、幼いころから学問を好み、朱子学を尊び信じて、誠実な

真の儒学者であった。ある時、ほど近い家で、失火があつたが、おりしも惕齋の家は風下だったので、親戚や門下生が驚いて急いで集まつたが、急に風向きが変わつて、風上となり、今は類焼する心配がないと、集まつた人はみんな安心して、お互いに喜んだが、惕齋一人だけ、かえつて逆に心配する様子がひどくなつてきたので、人々はいぶかしかつてその理由を問うたところ、「その火元の近くの人々は、今まで風上だからといつて、安心して油断していたところ、急に風が変わつたので、喜びはたちまち變じて、きつと慌てふためき、不安でたまらなくなるだろうと、思いやられ憂いているのだ」とお答えになつたので、集まつた人々は感じ入つて、急いで火元に駆け寄つて（火事を）防ぎ（人々を）助けたと、ある人が語られていた。